

## 娯楽

錦織監督

## 映画の現場から



●○○23

## 価値観の転換期に贈る心の映画「渾身」④

映画関係者には島根が舞台の企画はいつも「地味」という印象があるようだ。12年前、「白い船」の脚本を持ってスポンサーを回った際、この話は何年前のことですか?と尋ねられた。ほんの少し前です、と答えると、昔のことならまだしも、リアリティがない、と言われた。

大仰にメディア論を繰り広げる気持ちは毛頭ないが、観客の想定外の企画は、よっぽどことがない限り狙上(そじょう)には載らないことを思い知った。島根がどこにあるかも分からない人の方が多いのだから、興味がわかないだけかもしれないが、当時の松江SATY東宝の支配人さんが、白い船の予告編を若い観客の多い「陰陽師」の試写会の冒頭に上映し、アンケートの最後に予告編の感想の項目を入れた。感想の多くが「島根が舞台の映画だから地味な感じ」とか「島根の映画が面白いはずがない」などのネガティブなものだった。

## 大きな揺り戻しの時期

みんながよく知っていること、あるいは知っているつもりになっていることの陰に潜っているものに光を当てたいと思うようになったのはそのころからだ。

映画「うん、何?」は手前みそだが映画関係者や、クリエイターなどの間で一番評価をいただいている。フランスでの上映の際、ブルーガイドの編集長の質問攻めにあった。彼はすぐに雲南や奥出雲に取材に訪れている。「RAILWAYS」の際も企画を理解してもらったりスポンサーを探したりするのに相当でこずった。中央にメディアが集中していることは合理的だが、「情報の陰」もまた生まれやすいのではないか。分かりやすく説明できないと置いてきぼりにあったような気分になり、慌てて迎合すると、すぐに飽きられる上に、刺激のある情報に偏っていき後戻りできなくなる。映画も同じだ。

自然の怖さや優しさを謙虚に受け止めていた日本人は、何でもない日常にドラマを見だし和歌にしたため、能や生け花、お茶、枯れ山水の庭園、盆栽などなど……一言で説明できない深みや奥行きを愛(め)でできた。

今年は古事記編さん1300年。来年は出雲大社の大遷宮、と偶然ではなく、時代が大きな揺り戻しの時期を迎えているのではないかと思う。自然は人間がつくれないもの……と、八百万(やおよろず)の神様と共に自然への畏敬の念を持ち、共生してきた日本人の強さを隠岐の島にみた。

碧(あお)い海、青い空が広がる隠岐の島で撮影した映画「渾身(こんしん)」は間もなく完成する。延べ80人のスタッフ、20人の俳優、4千人以上のエキストラの皆さんの協力によって「厚み」のある画(え)を撮ることができた。ひとえに4島の関係者の皆さんの協力に他ならない。最新作が最高傑作……との思いでいつも撮影に臨むが、皆さんのご期待に沿う作品になったと思っっている。「渾身」が多くの人々の心の支えになれば、こんなにうれしいことはない。

(錦織良成・映画監督)

|| 第2、4金曜掲載 ||

映画「渾身」のワンシーンより

